



全国私立大学 FD連携フォーラム

全国私立大学FD連携フォーラム ニュースレター

News Letter No.4



C O N T E N T S

02	2012年度の取り組み紹介
03	2012年度活動報告
04	－懇談会企画(2012年12月6日(木))開催案内－
05	新規加盟大学の紹介
06	中部大学、九州産業大学、明星大学
07	FD徒然草 Part3「問題解決と課題解決」 関西大学教育開発支援センター センター長 田中俊也
08	お知らせ 入会のご案内 「実践的FDプログラムについて」

2012(平成24)年度の取り組み紹介

2012(平成24)年度 行事・会議

・2012年度 第1回 幹事会

日 時：2012年6月16日(土) 12:30～13:30

場 所：中央大学 後楽園キャンパス 3号館9階3907号室

・2012年度 総会およびパネルディスカッション

日 時：2012年 6月 16日(土) 13:30～17:10

場 所：中央大学 後楽園キャンパス 3号館10階 31008号室（大会議室）

・2012年度 幹事校ミーティング

日 時：2012年12月6日(木) 13:00～14:00

会 場：立命館大学 東京キャンパス／衣笠キャンパス

・2012年度 会員校ミーティング

日 時：2012年12月6日(木) 14:00～15:00

会 場：立命館大学 東京キャンパス／衣笠キャンパス

・2012年度 懇談会企画

日 時：2012年12月6日(木) 15:15～17:30

会 場：立命館大学 東京キャンパス／衣笠キャンパス

・2012年度 幹事校ミーティング

日 時：2013年3月7日(木) 15:00～17:30

会 場：立命館大学 東京キャンパス／衣笠キャンパス



2012年度総会の様子



2012年度パネルディスカッションの様子



懇談会企画の様子

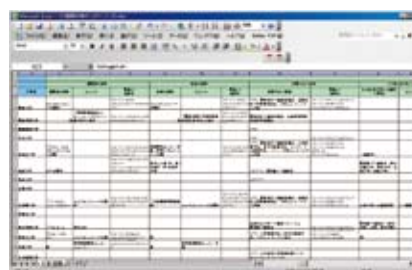


幹事校ミーティングの様子

FDデータベースの開発

2012年度後期よりFDデータベースシステムの運用を開始しました。フォーラム加盟校のFD関連情報（FDを推進する組織体制や各分野ごとの取り組み状況など）をデータベース化しました。これを共有することで、各大学のFD活動の活性化を目的とした、さまざまな情報を効率よく取得することが可能になりました。同規模私立大学が共通して抱える課題の解決・改善の一助となるだけでなく、各大学で新たな教学改革などを検討する際の他大学調査や、共同で行う取り組み（企画、イベント）の参考など、多様な活用が期待されます。

（※利用は加盟校限定）



加盟校一覧



大学別一覧（例）

2012年度活動報告 ― 懇談会企画（2012年12月 6日（木））開催報告―

フォーラム加盟校による懇談会企画を実施しました。懇談会では、各大学がさまざまな取り組みについて、実際の事例を含めた状況や課題を共有することにより、取り組みの改善の参考とすること、また、他大学の担当者と交流を深めることを目的に開催しました。

グループ懇談は、関東、関西それぞれの会場で2もしくは3つのテーマ毎にグループに分かれて行いました（懇談テーマと概要は下記参照）。グループ毎に司会担当者を決め、随時休憩をはさみながら懇談を行いました。懇談終了後は、まとめとして関東会場と関西会場をテレビでつなぎ、各グループの懇談内容を全体で共有しました。

昨年度の懇談会に引き続いて 両会場で開催された 授業アンケート については、何度も取り上げられているにも関わらず、今回も議論が尽きない状態でした。そこで、授業アンケートの結果を検証できるような具体的な取り組みの共有等を、次年度総会のテーマ候補として考えています。その他のテーマについても、今後のフォーラムでの企画や懇談会企画につなげていく予定です。

最後に全体司会より、全体の意見を通じて、特に「教・職・学協働」については、他のグループでも議論になっていたため、教員、職員、学生が三位一体になり、共に学び、成長し合う仕組みが次のステージとなるのでは、とのまとめがあり、企画を終えました。今回も各グループで活発な議論が行われ、各自が自大学の取り組みへの具体的なヒントを得た場となりました。

実施概要

日時：2012年12月 6日（木） 15:05～17:30（会員校ミーティング終了後）

場所：関東会場 立命館大学 東京キャンパス・関西会場 立命館大学 衣笠キャンパス

（※テレビ接続）

テーマ

関東会場 A：ピア・エデュケーション B：授業アンケート C：FD推進における教職協働

関西会場 A：ピア・エデュケーション B：授業アンケート

各グループ懇談概要

関東A：ピア・エデュケーション

【参加大学】国士舘大学、創価大学、立命館大学、早稲田大学（50音順、以下同様）

- ・学生が大学を良くしていこうという意識（大学に関わろうという意識）に高低差があることが分かった。学生の関わりが強い大学は、学生同士の活動が活発で、逆に学生の大学への関わりが強い大学は、学生スタッフ等を募集しても学生が集まらない状況がある。
- ・学生と大学の距離が近い大学は、学生の意見を大学側が吸い上げようとする仕組みが整備されている。仕組みがあれば学生の声が届くために学生の意識が高くなるという好循環となっている。
- ・部署が複数ある大学では、部署同士の情報交換の場がないという悩みがある。これに対し、会議をたちあげて情報共有を行うという事例の紹介もあった。
- ・FDについて情報交換をしていくなかで、グループのテーマである学生スタッフにとどまらず、授業アンケートや新任教員研修の話をするこもでき、有意義な場となった。

関東B：授業アンケート

【参加大学】九州産業大学、國學院大学、国士舘大学、芝浦工業大学、東京農業大学、立命館大学（※下線：欠席）

- ・議論が多岐に渡り、さまざまな点に関して課題共有が進んだ。
- ・授業アンケート実施の目的は、多くの大学で授業改善がメインであったが、何をもちて授業改善とするか、という点については課題があることを確認した。
- ・アンケート結果公開の範囲や方法について、具体的な状況と課題の共有を行った。
- ・実施対象について、範囲やその設定（受講者数によるのか、科目の位置づけによるのか）について共有することで、大学による課題が見えた。
- ・実施方法について、Web、携帯等のツールを使うのか、紙で実施するのかについて実施状況とそれぞれのメリット・デメリットの意見交換があった。実施率や、記名／無記名かどうかなど、各大学のさまざまな背景と課題があった。
- ・アンケート実施にあたっては、戦略的に 明るく授業改善をしていくべきであることを確認し、具体的な取り組み事例として、報告の場を持つ等の事例紹介があった。

2012年度活動報告 - 懇談会企画（2012年12月 6日（木））開催報告 -

関東C：FD推進における教職協働

【参加大学】九州産業大学、国士舘大学、創価大学、中央大学、立命館大学

- 教職協働という言葉からイメージする取り組み事例について各大学の事例を共有した。
- 教職協働が進んでいる大学、進まずに困っている大学の状況を共有した。大学としての方向性をどう共有していくかが課題、という大学もあった。
- 事例として、センターのオフィスアワーのなかに、専任教員だけでなく職員（うち数名はステューデント・コンサルタントという資格の認定を受けた職員）も 教員と職員が一緒にオフィスアワーの運営について話し合い、コマを担当している事例の紹介があり、興味深かった。
- 学生と教員のFDへの意識の差をどう「見える化」していくかが課題としてあがった。
- FDを進めていくうえでSDが重要であるため、SDの事例について情報共有した。
- 教・職に加え、学、さらには父母も巻き込んだ協働が必要ではないか、という意見があった。
- 教職協働の到達点（どの状態が教職協働達成 といえるのか）を考察することも必要であり、今後話し合いの場を持つことは有意義である。

関西A：ピア・エデュケーション

【参加大学】関西大学、中部大学、同志社大学、立命館大学、龍谷大学

- ピア・サポートをする本人、受講生、教員の3者に対して効果のあるものでなければならないことを確認したうえで、各大学での取り組み状況について情報交換・意見交換を行った。
- ピア・サポートをする先輩を見て後輩が憧れを抱き、次世代につながっていくという好循環を生むには、そのための仕組み・しかけ作りが必要である。具体的には、仕組み（制度）を実施・支援する場所や研修、スタッフの充実が必要である。
- 職員としてのピア・サポートへの関わり方についての課題提起があり、意見交換を行った。そこでは、特に私立大学においては職員の働きが非常に重要であり、その職員が育つ環境が非常に重要である、という意見が出た。
- 大学教育は変化（転換）しており、ピア・サポートといっても非常に多様である。大学教育の在り方の変化について、教員も職員もきちんと学ぶ必要があるのではないかと。また、ピア・サポートを私立大学で根付かせていくためには、教員や職員の立場を超えて協力して考えていくことが重要であると思う。

関西B：授業アンケート

【参加大学】関西学院大学、京都産業大学、名城大学、立命館大学、龍谷大学

- 最終的には、学生とのコミュニケーション（学生へのフィードバックの視点）が重要である。
- 授業終盤のアンケートだけでなく、加えて授業期間内に対話シートを実施し、受講生にフィードバックする方法の紹介があった。
- 自由記述の問題について、担当教員に対するフィードバックのしかたについて情報交換を行った。担当教員にそのまま返すのか、センターや執行部担当者が内容を確認したうえで返すのか、についてそれぞれ背景と狙い、現状と課題を共有した。
- アンケートに対する評価疲れ、“やらされ感”が、教員だけでなく学生からも出てきている という意見があった。アンケートを行うことは必要であるが、原点に立ち返って 改めて考える必要がある。例えば、教員がやりたい方法・内容で、やりたいタイミングで実施し、自分自身で授業改善に役立てるのが重要では、という意見もあった。
- アンケートを組織的にどう活用するかが重要である。フォーラム等の場で情報共有するような工夫も重要である。

●質疑応答

自由記述について、授業の中で大きな問題が含まれた記載（ハラスメント等）があった場合の取扱いについて質問があった。大学による違いがあり、それぞれの大学の背景と課題の紹介があった。

- センターが独自に判断し、部署に対してフィードバックしており、全ての学生の生の声は、執行部に見てもらうようにしている。どこまでお互いに開示するかがひとつの課題である。
- 自由記述についてはアンケートとは別紙で実施し、用紙はそのまま教員に返却している。

中部大学

・全国私立大学FD連携フォーラムへの期待

中部大学は、『魅力ある授業づくり』をFD活動の重点目標と設定し、教育活動改善に向けた教員の資質向上策としての様々な取り組みを行っています。1キャンパスに7学部29学科を有するという大学の特徴を生かした取り組みも実践しています。異なる分野、文理の壁を越えた教員で行う「授業サロン」は、参加者が互いの授業を見学し、意見交換を通じて異分野ならではの授業運営に関する新たな視点を見出し、共有することを目的としています。この取り組みは、学部・学科を超えたFDネットワークを広げることも目的としており、本学の特色あるFD活動のひとつです。これらの活動を推進、支援する大学教育研究センターは、本学の教育全般に関する調査研究と大学教育の改革・改善、質的向上等を目指して活動しています。

本学では、全国私立大学FD連携フォーラムでの活動を通して、他大学で行われている活動や大規模私立大学が抱える悩みなどを共有し、お互いに見識を高めあう実践的な交流を積極的に図ることで、本学FD活動の具現化、活性化を推進していきたいと考えています。



Cumoc (キューモ) を活用した授業

・学内のFD実践紹介

FD活動重点目標『魅力ある授業づくり』を達成するために、各教員を対象とした啓蒙活動をはじめ、主に授業・教授法の改善を目指して、以下のような全学を対象とした取り組みを実践しています。

1. 教育活動重点目標・自己評価シート
2. 『魅力ある授業づくり』への取り組み
 - ・「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」
 - ・授業改善アンケートシステムの提供
Cumoc (キューモ): Chubu University Mobile Clicker
 - ・授業改善ビデオ撮影支援制度
 - ・授業のオープン化制度
 - ・全学公開授業
 - ・授業サロン
3. FDフォーラム・FD講演会
4. 教員キャリアアッププログラム
5. 教育活動顕彰制度

なお、これらの活動以外にも個人レベルはもとより、学部・学科を中心にそれぞれの組織で工夫した取り組みを推進、支援しています。



授業サロン (意見交換会)

九州産業大学

・全国私立大学FD連携フォーラムへの期待

全国をまたがる、私立中規模大学(8,000人以上)の連携機関は他に存在しません。九州という地にあって、関東、関西を中心とする各大学との連携の中で、本学は多くの事例や取り組みを参考にしたいと考えています。また、全国レベルでFDを積極的に推進し、教育の質の保証を高めていくためにも、特に学士課程教育における改善・改革を目指して、さらに一歩踏み出した活動に期待しています。

・学内でのFD実践紹介

九州産業大学では、建学の理想「産学一如」のもと、全学的なFD委員会を基軸として、組織的にFD研修会、授業評価アンケートの実施、1年生へのアンケートの実施、公開授業や授業研究会など、さまざまな取り組みを行っています。その成果を組織として活用するとともに、知見を共有し、教育改善を行うために、

①授業内容・授業方法の改善

②大学全体の組織としての教育力向上

の2点の視点から全学的なFD活動に取り組んでいます。上述した授業改善のために行われるさまざまな試みはもとより、教育重視の大学を目指す本学としては、学部・大学院における教育改善のための、組織としての構成員の相互連携や協働体制の確立、教育理念の共通理解・目的の共有が不可欠です。

教育における教員個人の創意工夫・改善努力と、組織としての教育力向上への取り組みとは、まさに車の両輪の如く、共にFDの充実・発展に資しています。

以上のように、本学は

①教員の更なる教育スキルの向上

②学部・大学院における教員相互の協働促進

を含め大学の組織としてのFD推進を不断に実践しています。

新規加盟大学の紹介

明星大学

・全国私立大学FD連携フォーラムへの期待

高等教育を取り巻く環境は目まぐるしく変化しており、特に大学における教育の質の保証が求められる中、我々はどこから手を着けてよいかなど、様々な局面での悩みは尽きません。組織的に取り組まなければならないこと、個人で取り組んでいかなければならないことなど、まさに暗中模索の状況です。

全国私立大学FD連携フォーラムを通じて、様々な情報を共有させていただき、少しでも本学におけるFD活動の一助になればと考えております。

・学内でのFD実践紹介

本学では、MI21 (Meisei Innovation for the 21st Century) プロジェクトを全学で展開し、バランスド・スコアカード (BSC) を用いた経営管理手法により、教育の質保証の観点などを踏まえ、PDCAサイクルを回すよう組織的に取り組んでいます。「授業改善の取り組み」「進路決定率」「科研費申請件数」等全学の数値目標を達成する為に、学科を基軸としたSDU (Strategy Drive Unit) が様々な施策を実行しています。毎年度末にはその取り組みを振り返り、改善点を翌年度に生かします。これに教職員が一丸となって取り組むことにより、大学の現状を数値的に把握することで問題を認識し、FDへの取り組みにも応用しています。最近では各部局で進む教育の質保証に係る議論や取り組みに関連して、連動する形で全学FD研修会のテーマを設定しています。



◆基礎力アセスメントの応用 (2011年度)



◆授業アンケートによる授業改善 (2011年度)

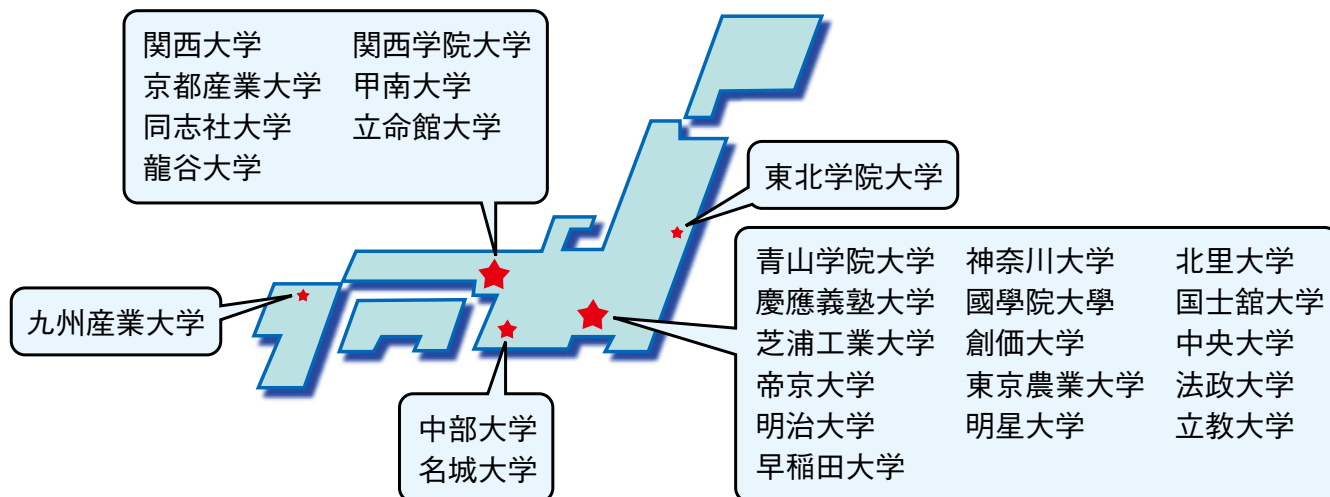


◆授業内容の工夫：グループワーク (2011年度)



◆DP、CPに基づく教育の質保証 (2012年度)

〈現在の加盟校一覧〉(50音順)



※2013年4月より 日本大学 が加盟予定



問題解決と課題解決

関西大学教育開発支援センター センター長

田中 俊也

(たなか としや)

関西大学文学部教授。専門は教育心理学・認知心理学。そこから発展して、高等教育・初年次教育関係にも強い関心を持ち、2011年10月より教育開発支援センター長。

カーネギーメロン大学客員研究員、心理学研究科長等歴任。ttank@kansai-u.ac.jp

平成元年に関西大学に赴任して以来、ちょうど四半世紀になる。その前、名古屋の小さな大学に6年いたので、大学教員としては30年を超えるキャリア、ということになってしまった。そのキャリアに相応しいかどうか、大学教育のことを考えさせられる学内の役職につくことも多い。2歳年下の妹が現在松山市の小学校での校長をしており、会うたびに「教育現象」としての大学教育（高等教育）という視点を持つことの必要性を無言でつきつけられている気もしている。

ぼくの専門は心理学で、その中でも、思考・問題解決の領域に関心を持ち、学位論文もその領域の基礎的な実験結果を中心にまとめたものである。今にして思えば、そこでの「問題」は、人工的な「課題」であって、決してそれに取り組む「被験者」にとっての「問題」ではなかったであろうという気がする。実験者であるぼくが一種強制的に相手に「問題状況」を強いたものであって、被験者にとっては与えられた「タスク」をこなしている、そのプロセスを「問題解決過程」として分析したものであったのかもしれない。正確には「課題解決過程」と言った方がいいのだ。被験者は幼稚園・保育所の幼児から児童・学生と幅広くとったが、いずれにしても彼ら彼女らには、先生・先輩にやらされている「課題」であったのだろう。

自然発生的に自己の内部から生じた「問題」を解決していく過程を研究するつもりが、人工的に与えられた「課題」をこなしていく過程の研究にすり替わってしまったのだ。それでも最大限の工夫として、その解決過程における情報探索の様子を、眼球運動や頭部運動といった観察可能な指標を使って記録し、できるだけ生々しい解決過程を把握するよう努めたものである。

大学の教員が「授業をうまく進めたい」というのは「課題」であろうか、「問題」であろうか？「課題」とみなせば、それは、「うまく進めた」という実感を強く持つ人の実践を踏襲することで、解決過程にあるという申し開きに使うことができる。実践集・ティップス集からの援用で解決の努力をしているフリはできる。「授業をうまく進めなければならない」という課題にとっては、それらの活用は必須であり、初任者研修では勢いそうした話になってしまう。現在、多くの大学のFD活動はその方向にある。

しかし、本当に必要なのは、個々のそうした教員が、現在の自分の状態を「問題」として感じ、それを何とかしたいと解決を志向していることである。なぜ「問題」か、といえ、研究成果の吐露だけでは学生の教育に繋がっていないこと、教育はおざなりのノウハウの援用だけでは成り立たないこと、結局何を目指した教育実践なのかの目的意識が不十分であることの自覚が足りないこと、にある。課題はカリキュラム（シラバス）をこなせば解決するが、「問題」はそれ自体を明確に意識化しなければ解決につながらない。

「問題」を「課題」に矮小化してはいけない、と自省を込めて感じているこのごろである。

● お知らせ

2013年度より全国私立大学FD連携フォーラムの体制が変わります！

フォーラムの拡大に伴い、2013年度より、関東、関西それぞれに「地域担当幹事校」を置き、地域毎の交流を一層推進します。また、両地域をまとめる「代表幹事校」（「地域担当幹事校」のいずれかが担う）を置き、全体企画の実施や情報共有をはかります。

● 入会のご案内

全国私立大学FD連携フォーラムは、全国の中規模以上（学生数8,000名以上）の私立大学が連携し、全国の高等教育の質の向上を目指し、活動しています。

詳細は全国私立大学FD連携フォーラムホームページ

(<http://www.fd-forum.org/fd-forum/>) をご覧ください。

入会は随時受け付けています。入会を希望される場合は、ホームページの「入会のご案内」をご覧ください。

*フォーラム運営に係る費用は会員校の年会費で賄い、会員校の年会費は、当面、年間5万円としています。

*フォーラムの入会やその他ご質問等ございましたら、下記事務局までお問合せください。



<http://www.fd-forum.org/fd-forum/>

● 「実践的FDプログラム」について

〈2012年度 報告〉

◆2012年度オンデマンド講義 更新状況

2012年度は、新規作成、1Part追加を1本ずつ行いました。いずれも2013年度より公開します。

[新規]「大学管理運営Ⅷ」～教職協働による大学運営～

講師：大島 英穂（立命館大学）

[追加]「教育方法論Ⅳ」～学習教材における著作権等への理解～

講師：坂井 知志（常盤大学）

◆2012年度公開ワークショップ（※公開は会員校のみ）

	講 座 名	テ ー マ
1	教育方法論演習Ⅱ	良い授業のための留意点 - 話し言葉に着目して～図形並べ
2	教育方法論演習Ⅲ	良い授業のための留意点 - 非言語・視覚情報の応用～無言面接
3	心理学演習Ⅰ	聴き手に求められる力
4	教育評価論演習Ⅱ	ティーチング・ポートフォリオの作成
5	授業設計論演習Ⅰ	シラバスと授業の到達目標の書き方
6	授業設計論演習Ⅱ	強制連結法による授業設計
7	授業設計論演習Ⅲ	マイクロティーチングと評価
8	教育評価論演習Ⅰ	学習到達度評価 ～ルーブリック評価の実際
9	心理学演習Ⅱ	受容的に聴く力 ～イヌ・バラ法
10	心理学演習Ⅲ	アサーション・トレーニング
11	教授学習理論演習Ⅰ	アクティブ・ラーニングの方法と実践～ピア・サポーターの活用を中心に
12	教授学習理論演習Ⅱ	アクティブ・ラーニングの方法と実践～ICTの活用を中心に

〈2013年度 利用申込案内〉

◆利用期間：1年間（5月利用開始・毎年3月末終了）

◆利用申込：

以下ページより「利用申込書」を入手し、下記事務局へお送りください。

利用申込は随時受け付けていますが、手続のため、利用開始までに約2週間程度かかります。

[会員校]

全国私立大学FD連携フォーラムのホームページ

http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/fd_application.html

[非会員校]

立命館大学 教育開発推進機構のホームページ

http://www.ritsume.ac.jp/acd/ac/itl/fd_p/fd_program.html

◆「実践的FDプログラム」利用料

利用者数	会員校利用料	非会員校利用料
1～9名	10,000円	20,000円
10～19名	30,000円	40,000円
20～29名		60,000円
30名以上	50,000円	—

※ご不明な点、詳細は下記事務局までお問合せください。

事務局（各種お問合せ先）

立命館大学 教育開発推進機構（事務局：教育開発支援課）

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318
e-mail: fd1cer@st.ritsume.ac.jp

発行日：2013(平成25)年3月